

一橋の傳統における經濟政策思想

——一橋大學創立八十三周年記念講演——

赤 松 要

まもなく私が停年退職になるということからでありましょうか、私にこの第八十三回の開校記念日の記念講演をやるようにとの山田雄三學部長のお話でありまして、この機會を與えられましたことを深く感謝申し上げます。さて開校記念に適しい問題をと思つて「一橋の傳統における經濟政策思想」という大きな題をかかげましたが、實を言えば私自身の體驗したことだけについての話で、いわば私の回顧談にすぎません。従つて視野は包括的でなく、また全く見當違ひのことを申すかも知れず、その點は然るべくお聞き流しをお願いします。

その前にまず私の經歷を簡単に申しておくことが必要かと存じます。私は大正八年即ち一九一九年四月に本學の前身である東京高商の專攻部に入學したのでありますが、その三月に姉妹校である神戸高商を卒業したのであります。その當時、第一次世界大戰が一九一八年十一月に終戦になつたので、わが國は戰勝國として、また莫大な輸出超過國として好景氣の絶頂にあり、私どもも卒業前から諸會社の宴會に招かれて入社を強要される有様でありました。しかし私は、これはまさに噴火山上に踊るものとして、資本主義の前途に大きな疑いをもつたのであります。このいわば危險思想は私自身の生活が極貧のうちにあつたことにもよるが、今から考えると、第一次

大戦終戦の頃から發刊された河上肇博士の個人雜誌「社會問題研究」によるマルクス學說の紹介に影響されたかと思うのであります。このような資本主義への疑惑から私は會社に就職することを躊躇し、むしろ社會運動に投ずべきことをひそかに決意したのであります。しかし、社會運動に入るにしてもマルクスの理論は研究しておかねば心細い。まずマルクス研究が第一だと考えたので、東京高商の專攻部に進學し、福田徳三先生の下でマルクス研究の指導を受けたいと決心したのであります。

神戸でも苦學していた私は東京でも友人の紹介で今の水道橋側の東洋高商で學生服のまま教鞭をとり、福田先生のゼミでマルクス研究に入ることができたのであります。

福田ゼミでマルクスを研究した先輩には資本論の一部を最初に邦譯した松浦要氏があり、その次に私であったかも知れません。私の姓名が同氏とよく似ているので、資本論をはじめて譯したのは私だと間違えられて恐縮したことがしばしばあります。福田先生は私に一八五九年に出たマルクスの「經濟學批判」から始めるように命ぜられ、それを讀んでゼミの報告をしたのであります。

先生は一再ならず私に、「研究するということは悪口をいうこと、つまり批判することだ。河上肇君のようにマルクスの受賣りをやることは研究でも學問でもない。批判なくして學問はない」ということをいわれたのであります。それで私はできるだけ忠實にマルクスを解釋するとともに、他方に今まで外國で書かれたマルクス批判書を読んで、マルクスの批判的研究をやることになりました。ゼミでは先生の意に反すると殴られるおそれがあるという傳説があつたので、私どもは戦々競々として先生の指示に従つたのであります。その結果として私は知らず知らずマルクス批判者の立場に轉換してきたのであります。そして私の社會運動に投じようとする情熱は次第にあせて、學界に入り、灰色の理論の世界に住むことが自分として適當だと思ふようになりました。思えば事、志と違つたことになつたのです。大正十年專攻部卒業と同時に福田先生の推ばんによつて同年に創立された名古屋高商に奉職することになり、昭和十四年三月に本學に招かれましたので外遊期間を含めて名古屋に十八年、そして本學に退職まで二十一年を経過することになりました。これが私の概略の履歷書で、これを前おきとして

本論に入ることになります。

二

まず問題になるのは傳統とは何ぞやということであり、それは誰かひとりの創始者があって、その思想なり方法なりが、後に來るものによって受けつがれてゆくことが傳統といわれるものかも知れません。例えば一つの家の興祖たる人が家憲をつくり、これが代々に傳わってゆくことはその家の傳統でありましょう。大學のようないつの共同體グロウピングでも同様なことがあり、校風などといわれます。しかし學問の傳統ということはただそこで興った學問が後に傳えられてゆくということでは何の發展もないこととなります。學問の傳統には發展がなくてはならない。それでは發展とは何であるか。これを私は辯證法的發展だと解するのであります。辯證法的發展というのは、先學の思想をそのまま受けつぐということではもちろんなく、極端に言えば先學の學說に對立する批判的な學說をおこしてゆく。すわなちテーゼに對してアンチ・テーゼがおこり、それがシンテーゼにおいて止揚されてゆく。これが發展の基本形態だとおもうのでありま

す。先學の學說に何かの缺陷があり、未發展のものがあれば、それを批判的に展開してゆくことが辯證法的發展であります。私のかつて關心をもったドイツの哲學思想史で、例えばカントからフィヒテ、シェリングを経てヘーゲルにいたる發展は一つのドイツ理想主義哲學の傳統であります。この發展は辯證法的であり、先行者をアウフヘーベンする發展であります。ヘーゲル哲學に對する唯物論の對立もやはり、傳統の中からの發展でありましょう。

しかし日本の大學、日本の思想社會では傳統というものがある形づくられていない。それは明治以後の日本の思想が外國思想を受けついでいるからで、日本自身に確固たる傳統の地盤がないからであります。先學者は誰か外國の學者の思想を受けいれる、後學者はそれと關係なく他の外國學者の思想に據るといふことでは固有の傳統はできないのであります。日本ではこの意味でケインジアンとかマルキシヤンの學派の傳統はあつても日本独自の學派はない。思想の源泉が外國にあるので、日本の先學の學問とは無關係な發展がおこり、先學の思想を止揚する發展とはなりません。アウフヘーベンとい

ことは否定してしかもこれを内に保存することでありま
す。

一橋に來ていたブロンヘン・ブレンナー氏が日本學界
の同族結婚ということを通じて、たしかに、一橋
大學に例をとつても、その教授連中の大半は一橋出身で
あります。同族結婚からは白痴が生まれるそうでありま
すが、一橋の教授陣も次第に白痴に近づいているのかも
知れない。が、實際はそうでなく、同族結婚ではあるが、
彼らはみな外國の思想と「通じ」ており、實は雜婚にな
っているのです。同族であるが、全くの混血兒にな
っているのです。従つて同族結婚による白痴化
はあまり心配はなからうかと思ひます。とにかくこのよ
うな混血がおこっているのは日本が鎖國を破り、世界に
知識を求めて急速に發展しようとしたことからおこつて
いるので、後進國發展の過程における一つの法則性とし
止むをえないこととあります。しかし、この發展過程の
うちから何か日本に土着し根を張るような學問體系が、
學問の自己生産というものがおこつてきているので、機
械や原料は外國から輸入してもそれで自己生産をやる過
程、さらに輸入機械に代つて機械自身を自己生産すると

いう雁行的發展が徐々におこつてきております。單に外
國の思想をとり入れるということではなく、そこに何かの
自己生産がおこるとき、そこから本來の日本的な傳統が
はじまつてくるのであります。

三

いま私の問題は一橋の經濟政策思想むしろ簡單に經濟
思想の傳統であります。私としては恩師である福田徳
三先生から出發することになります。一橋にはなお福
田博士の先輩格になる工業政策の關一博士——後の大阪
市長——などがいられたのであります。やはり福田先
生が一橋ではもちろんのこと日本の學界でも經濟思想史
では巨峯といふべきものであります。その先行者があり
ますが、アダム・スミスが世界の經濟思想史において巨
峯であり、そこから出發してもよいと同じ意味で一橋
で、いな日本では福田先生から出發することにしてもよ
いかと思ひます。

福田徳三博士の貢獻は日本における西歐經濟學の輸入
ということ、先生の天才的な語學力とその消化力がこ
れを可能にしたのであります。それはドイツの歴史學派

からさらにイギリスの古典學派、新古典學派、さらにマルクス經濟學に及ぶ極めて廣汎なものであり、經濟史、學說史、經濟理論、貨幣・金融・財政、社會政策、社會思想、勞働問題、經濟政策、國際經濟、統計學さらに企業理論などの分野を包括するのであります。これは福田博士が一九二五年再度の渡歐に際して「經濟學全集」として六集八卷約一萬二千頁の全集に集成されておりません。それから後に「流通經濟講話」(大正十四年)「唯物史觀經濟史出立點の再吟味」(昭和三年)、死の病床で校正された「厚生經濟研究」(昭和五年)などを公けにされています。或る人が福田博士は經濟學のデパートメント・ストアだ、しかも別館が二つ三つあると申しましたが、或は至言かも知れません。そうすると弟子の私どもはとりあえず専門店としての小賣商というところでしょうか。尤も中山伊郎教授のごときは御問屋ぐらいにはなるかも知れません。

しかし、福田博士の業績はこのような輸入科學の大集成だけで終るものではありません。そこから一橋大學の經濟學が多岐に分化して、福田先生一人のデパートでなく、大學自體が學問のデパートとしてのユニヴァーシティ

となつてきたのであります。そこに一つの傳統があり、この傳統を今申した辯證法的發展によつて解釋することが私の意圖するところであります。このためには福田博士自からが、單に西歐經濟の輸入だけに満足されていたのでなく、何らか独自の體系を創りだすことを念願とされていたことをあとで申さねばなりません。

その前に福田博士のデパートが表面上、どういふ分化をしてきたかを眺めてみますと、第一に上田貞次郎博士は福田門下とはいえないが、卒業論文は福田博士に提出されたとききます。福田先生は明治廿九年に東京高商研究科を卒業して直ちに母校の講師となり、三十一年三月に外國留學にたたれ、三十四年夏に歸國されている。上田先生の専攻部卒業は明治三十五年であるから、福田先生の講義もきかれています。上田博士も多くその枝を生じた大木であります。その企業理論からは一橋の經營學の傳統が始っており、一橋でその流れをついだのが昭和二十年三月の東京爆撃で不幸にも爆死せられた増地庸治郎教授であり、そこから古川榮一教授や藻利重隆教授などが傳統をつくっております。次に上田先生の學問の特質はその名著「イギリス産業革命史論」にある

と言えるでありましょう。近代産業發展の實證的研究であり、それは門下の猪谷善一教授——後に商工會議所理事に轉出——の明治維新以後の研究として、また山中篤太郎教授の「イギリス勞働組合發達史論」として受けつがれております。この傳統には現實の事態をその内部から理解しようとする「方法なき方法論」ともいべきものがあるようであります。次に上田博士の晩年の研究はもっぱら日本の人口問題に向けられたのでありますが、この研究にはもちろん山中教授も参加し、いま美濃口教授がそれをついでいるのでありますが、わが國に上田先生の影響などで人口問題研究所が設立され、上田博士の人口研究の傳統はむしろ學外にみのつたようでありま

す。

次に上田博士の商業政策は猪谷教授につがれたが、その轉出のために私が上田先生に招かれてこの講座をつぐことになりました。このことについては後に申したいのであります。また上田博士は昭和十五年に東亞經濟研究所を學内につくられ、私が最初の研究部長としてその組織に參畫したのであります。これが今日の經濟研究所の前身であり、いわば上田博士の實證的精神の傳統が流れ

ているのであります。

歴史の三浦新七先生は福田博士よりも三つ後輩であり、或は福田博士の講義をきかれたかも知れないが、ここから一橋の文化的經濟史觀ともいべき傳統がおこっており、私と同期の村松恒一郎教授、さらに上原專祿教授、ついで増田、増淵諸教授にいたっている。經濟史は福田博士の研究分野として大きな地位を占めるが、三浦先生からの流れは獨自のものとするべきでありましょう。この流れで、上原教授の戦後の絶對的平和論はおそらく科學としての歴史的認識から出てくるものではなからうと私の疑問を書いたことがある。これは上原教授が學問を尊重すること嚴であったから特におこつた疑問であつた。この外に、佐野善作博士は福田先生の先輩でもあり、ここに發する金融、爲替理論は高垣寅次郎、内藤章、山口茂の諸教授を通じて高橋泰藏、小泉明教授にいたり、ケインズに結びついて大きな展開がある。高垣門下の高橋、名古屋の鹽野谷、神戸の新庄の三教授は日本金融學會で光っている。この外に海上保險では村瀬春雄、藤本幸太郎、加藤由作の諸博士がつづき、會計では昔の下野直太郎博士から太田哲三、高瀬莊太郎の兩博士があ

り、一橋特有の傳統を形づくっているがこれらは私の視野の外におかねばならない。

四

さて福田博士の本流に歸ると、古い門下生として左右田喜一郎博士と神戸の坂西由藏博士とがある。坂西博士は福田の經濟史を展開した後繼者であり、この傳統は現在の宮下孝吉教授につがれ、むしろ神戸に流れている。

左右田博士は卒業論文の「信用券貨幣論」によってすでに師の意表に出で、さらに東京高商創立四十周年記念講演「カント認識論と純理經濟學」によってその師を論敵とすることになり、ここに一橋の經濟哲學の源流が開かれたことになりました。これはもちろん福田の血を受けてドイツ理想主義と混血したことから起こったことであります。左右田の本流は私と同期の杉村廣藏博士にいたるのでありますが、白票事件に厄を受け、またやがて病に倒れたのは惜しむべきであります。また同じ左右田門下としての秀才、川村豊郎、本多謙三の諸氏も夭折し、左右田門下は全く悲運という外ありません。

しかし、左右田哲學のために現象學の山内得立博士が

一橋に招かれ、左右田先生も昭和二年になくなったため、意外に山内門下から哲學の太田可夫、藤井義夫の兩教授は別としても高橋長太郎、馬場啓之助、坂田太郎などの諸教授が輩出しており、これはやはり左右田の傳統のうちにあるものとみるべきでありましょう。もちろんこれらの人々も他から雑多の混血を受けているので、左右田哲學の血統は稀薄になっていくであろう。しかし、ドイツにおいて左右田の師であるリッケルトなどの新カント派の哲學がフッサールやハイデッカーの現象學に移行するような展開が一橋の傳統にも欲しいのであります。福田先生からクナップの貨幣論を受けついで神戸の宮田喜代藏君はフッサールに據って左右田貨幣理論の超克を志しているようです。

白票事件で問題となった杉村君の「經濟哲學の基本問題」では經濟的認識のアプリオリを「經濟性」の概念に求めているのでありますが、これはカール・メンガーから引出されたものであります。しかし、メンガーの限界效用説は左右田博士が經濟心理學として排撃したもので、杉村學説はすでに左右田説のアンチテーゼをなしているものであり、一つの展開であります。ただ彼は左右

田説の充分な批判なくして師の否定した學説をとり入れている。これでは先學の止揚でなく眞實の發展的な傳統とはなりえないと思います。

さて福田先生の本流に歸つて、その經濟理論の流れはまず一橋では大塚金之助教授につがれている。大塚教授はマーシャルの經濟學原理の忠實な邦譯者として知られており、これはおそらく福田先生の勸奨によつたものであろうかと思われ、師福田のマーシャル研究を完成するものでありましょう。しかし、大塚教授はおそらく外國留學中からマルクス研究をやられ、歸國後に福田先生の原論講座の競争講座としてマルクス經濟學を講義されたのであります。ここに一橋の經濟原論の競争講座の起源があるようです。この競争講座の創設を強く主張したのは福田先生であり、従つて大塚教授にマルクス經濟學を講義せしめたのも福田先生でありましょう。しかし、福田先生が大塚氏にマルクス研究を勧められたかどうか、まだその邊のことを大塚さんに伺つていないので何ともいえないのですが、少しおかしな言い方をすれば問題はずの混血か公然の混血かということになります。いずれにしても福田先生がこの混血を認め、競争講座と

して自分の敵陣であるマルクス經濟學を許したことは偉いと思います。しかもこの競争講座以後大塚教授の講義には教室一ぱいに學生がおし寄せ、福田先生の講義には二、三十人の學生が聴講したにすぎなかつたといわれます。このときまさに福田先生は悲劇的人物であつたのです。同じ福田門下で大塚教授とやゝ似た傾向をとつたのが惜しくも昭和二十七年になくなつた杉本榮一教授であり、また現在の高島善哉教授でありましょう。競争講座の第二代目として第一原論の中山教授の一般均衡論と第二原論の杉本教授の部分均衡論ないし不均衡論との對立は興味深いものでした。この競争講座の傳統は一橋において今後も生かされねばなりません。中山をつぐ荒憲二郎と杉本をつぐ種瀬茂との競争講座は往時の中山・杉本時代を再現できるかどうか。

昭和五年に福田先生が逝去されて、その第一原論の講座をついだのがいうまでもなく中山伊知郎教授であります。中山教授はクルノーやワルラスの數理經濟學を福田先生のゼミでやり、外國ではシムペーターについて、歸來名著「純粹經濟學」を著し、一橋に近代經濟學の城廓をつくつた人であることは御承知の通りであります。

す。福田先生には数理經濟的な思考はほとんどなかったが、先生はおそらく、その缺陷を自覺されていたので、門下生にその研究を勧められたと思います。私の知る限りで、福田門下で第一にワルラスの研究を行ったのは私より二年先輩の手塚壽郎教授——教授は小樽高南にいたが、後に上海同文書院大學に轉じ病に倒れた——であり、それから私より二年後輩の中山教授であつたとおもふ。また中山教授の協力者として久武雅夫教授が現われ、一橋の数理經濟學は大きな流れとなりました。とにかくこのような福田博士の指導が一橋だけでなく日本の學界に数理經濟學を振り興すことになつたのであります。

五

福田先生の最も華かな學問分野は何といつても社會政策でありましょう。先生の「社會政策と階級闘争」はえがたい名著であると思います。先生には労働階級なり下層階級の地位を引上げようとする炎々たる情熱があつた。このために労働組合の團結權、労働協約權、また生存權の主張となつて現われ、當時社會局の參與ともなつ

て職業紹介法の立法などに参畫され、また關東大震災に際しては身を挺して草鞋ばきで罹災者の調査にあたりたりしたのであります。

先生の街頭進出と實際活動を受けついで、もっとも華かな活動をしているのは中勞委會長としての中山教授であることはいうまでもありません。しかし、戦前において純粹經濟學者であり、一般均衡論者であり、労働問題などについても殆んどみるべき論文もなかつた中山教授が、戦後一擧にして労働問題の渦中に投じ、争議調停の花形となるにいたつた、いわば突然變異についてのいきさつは私は知らないのですが、或はその緻密な理論、明快な判断と融通性は別として彼の純粹經濟學の中立性が勞使對立のシンテーゼの立場として買われたのかも知れません。しかし、學者としての實際活動はその學問的勞作を背景とすべきことはいうまでもないことで、福田先生の實際活動はその學問から派出したものであります。この點で中山教授の實際活動は恩師福田先生の社會政策思想の背景なくしては考えられないことで、その傳統において考えれば突然變異でなく、時代を異にした福田傳統の發展でありましょう。

福田博士の社會政策の立場は「日本社會政策學會」の發展に大きな寄與となっております。この學會は當時の東京帝大の金井延教授などによって明治三十三年——福田博士の留學中——に創立されたものでありますが、やがて福田先生がその中心的指導者となりました。しかし、この學會は大正十年前後において行詰りになり、自然消滅となったのであるが、これは言うまでもなく、社會政策に對立する社會主義の勃興によるのであります。社會主義と社會政策との論争はこの頃に福田・河上論争として雑誌「改造」誌上を賑わしたのであります。これは兩大家の皮肉やマルクス誤譯の指摘などの應酬に學生たちの興味をそそったもので、對立した根本的立場の解明にはあまり貢獻しなかつたのではないかと思われまゝです。「日本社會政策學會」でも社會主義論が登場すると、結局は信念の問題となり、「價值からの解放」を叫んだマックス・ウェーバーの學問論に立つとすれば、學會はもはやデッドロックに乗り上げざるをえなかつたのであります。

かようにして日本の經濟學者の大同團結であつた「日本社會政策學會」は消滅したのであります。この學會の

範となつた「ドイツ社會政策學會」はマックス・ウェーバーやゾンバルトの學問的立場の獨自性の主張のためか、ナチスによって彈壓されるまでつづき、戦後再び學會の名稱を變え、傳統の社會政策學會を副會名として再興されたのであります。この學會には先年私が戦後第一回の日本代表として派遣されたのであります。とにかく日本社會政策學會の消滅は日本人のセクシヨナリズムの一つの現われかも知れません。私は昭和十四年に本學に轉任してきて間もなく、經濟學者の大同團結としての學會がないことは遺憾だと感じ、山中篤太郎教授と圖つて「日本經濟政策學會」をおこし、その第一回の大會を昭和十五年に神田の一橋講堂で開いたのであります。その時の私の報告が綜合辯證法による經濟政策學の基礎づけであり、マックス・ウェーバーの精神に立ちながら、しかも客觀的にして具體的な價值判斷が可能であるということであつたと思ひます。この客觀的價值判斷の可能性が確立しないかぎり、マルクシズムや近代經濟學やの種々異つた立場にある學者が一堂に會して論議することは不可能でありましよう。「日本社會政策學會」の傳統をつぐものとしての「日本經濟政策學會」の成立は、ドイツ

ソ社會政策學會が戦後に變身したのに先きがけて戦前にこれを行ったことになります。しかし、日本の戦後においては日本のセクシヨナリズムは多數の學會——世界第一に學會の數は多い——を生み出し、別に狹義の社會政策學會も創立され、「日本經濟政策學會」——それは福田の傳統から生れたものであるが——の大同團結はやや稀薄となりつつあるようであります。

さて福田先生の社會政策を一橋の講壇にくだものは井藤半彌教授と山中教授であります、井藤教授はむしろ財政學を本領とされるものですが、これも福田先生のデパートの一部にあるものであります。しかし、財政學は内池廉吉博士が神戸から轉じて講ぜられたもので、内池博士は專攻部明治三十二年の卒業であるから福田先生の影響をどの程度受けられたかわかりませんが、とにかく井藤教授がそのあとをついで財政學を擔當されることになり、大きな財政學大系を作られたのであります。しかし、その大著「租稅原則學說の講造と生成」の根本的な方法論は左右田博士の認識論を受けつぐもので、もし福田先生がその時に存命であつたら、ひそかに通じておるなと思われたかも知れません。とにかく左右田哲學によ

つてその基礎理論が打立てられたことはやはり一橋の傳統をつくるものとして極めて重要であります。井藤教授の財政學は木村元一教授によってつがれ、そこに如何なる傳統的發展があるか、期待されるところであります。山中教授の社會政策は福田よりもむしろ上田の傳統をつぐものでその勞働組合や、中小企業の研究とつながるものでありましよう。

福田先生の社會政策の背景には社會思想、經濟學說の研究があり、學說研究では「トマス・ダキノの經濟思想」はかつて左右田博士によって福田博士の隨一の名作として稱揚されたものであります。この傳統は先頃急逝された上田辰之助教授によってつがれており、同教授は福田ゼミナリストではなかつたが、福田先生の強い學問的感化を受けた人であります。これも故人となつた金子鷹之助教授もほぼ同様の影響下にあつた人で、それは研究所の小原敬士教授につがれている。社會思想研究の面では慶應の小泉信三博士また大塚金之助教授に最も強く受けつがれており、これは小泉博士を通じて慶應にも福田の傳統となつていふやうであります。學外にある大熊信行博士は社會思想というよりも考現學的に多彩である

が、その家實ともいふべき「配分原理」は福田ゼミに於て會得したものと見えよう。福田先生の社會思想は一橋ではさらに高島善哉教授につたわり、戦後わが國の社會思想に同教授は相當の影響を與へたであらう。もっと地みちの學說研究は山田雄三教授の繼承するところであるが、山田教授はむしろ福田先生の晩年の思想「厚生經濟研究」をつぎ、ピグーの厚生經濟學から新厚生經濟學への研究となり、さらに厚生極大化の政策的視點に立てば「經濟計畫論」が當然に生まれてくると思われ、時代の展開とともに山田教授も福田傳統を發展させているものといえましょう。

その他、福田先生の統計學的思考は直接的でなくとも藤本幸太郎博士の統計學にうつり、それは森田優三教授また研究所の伊大知良太郎教授の統計學に發展するのであります。數理經濟學と統計學とは研究所の實證的研究と結合してエコノメトリックスとなるのであるが、この方面で經濟研究所では山田勇教授が同族結婚の例外をなし、エコノメトリシアンとしては中山門下の篠原助教の輝かしい進出がある。同族結婚の例外では都留重人、大川一司、野々村一夫の諸教授も、また産業經營研究所

の高宮晋教授も一橋に新たな血をもたらしたもので、一橋の傳統はこれらの異族結婚によって新たな展開をみせるものと思われるが、問題は學部と研究所との交流ということとをどうするかにあるだろう。

最後に一橋經濟學部の經濟政策の講座もまた福田先生の創設されたもので、先生の視野も大正の末期から狹義の社會政策より經濟政策に轉じたように思われます。この講座は山中教授と私が受けついでいる。福田門下の末弟であり、中山伊知郎門下の初代である板垣興一教授の助手時代のハイデッカーないしリストの線による經濟政策的認識の基礎づけは左右田哲學をぬけ出したものとして注目されたのであって、いまその研究は或はリスト的視角において後進國ナショナルリズムの研究に向けられている。これは根岸佶先生をつぐ村松裕次教授や石川滋助教の中國經濟研究と共にアジア經濟研究として日本學界の最高峯に立つものであります。經濟政策の一部門としての農業政策は昔は横井時冬先生があり、後には東大の東畑精一博士が長く一橋の講壇を賑わした。異族の良い血は今後も受けいれるべきだと思ふ。

六

以上に一橋經濟學の表面的な傳統を概括したのであるが、この傳統のうちに流れる内面的な思想の發展を觀察することが、私の本來の意圖であるが、これこそ私自身の接觸だけに限定されなければ、いま到底これをなしえないのであります。明治以來のわが國は現實の産業世界においても、觀念としての學問世界においても後進國として出發してきたのであって、明治以來わが國の發展と歩調を共にする一橋學問にも「雁行的發展」がみられるのであります。明治初期の時代においては文明開化の波に乗って西歐で出來上った學問が輸入されたのであります。福田博士もまた西歐學問の輸入においておそらく最大の役割を果されたのであります。しかし福田先生のうちには學問方法論の自覺がありました。先生のドクトルアルバイトであるドイツ文の「日本における社會的、經濟的發展」は師ブレンタノの發展段階的方法論を適用した日本經濟史の再構成であつたのであります。學問體系をつくり出す認識方法は産業では機械、道具などの生産方法に當るもので、この方法が輸入されて、學問の自

己生産が行われてきたのであります。これはまた先生がローレンツ・フォン・シュタインの認識方法を吟味しつつ「社會政策の本領」を書かれたごとき、また後年の「唯物史觀の再吟味」、またアリストテレスの流通の正義による「厚生經濟」の構想などのごときはすでに何か親しい認識方法の形成に向つて精進されていたことを示します。福田先生だけについても西歐學問の輸入、次に自己生産のための認識方法の輸入、それによる自己生産、次にきたる輸出の段階はまだ達成されていないが、輸入した生産方法に代る生産方法自身の自己生産の段階にまで進もうとされていたのであります。

新たな經濟的認識の方法が輸入され或は自己生産されることは經濟學發展途上における一つの革新であります。福田先生によるドイツ歴史學派の認識方法の輸入もそうであり、また後のマルクスの方法の導入もそうである。さらに數理經濟學やケンズ的方法、レオンチエーフ方式などみな然らざるものはない。このような方法論の導入において日本の學會に大きな影響を與えたものの一つが、さきに述べた左右田博士のカント認識論の經濟學への導入でありました。これは従來の「欲望」から出發し

た經濟學を「心理主義」の弊に陥れるものとし、經濟的認識は先驗的なアプリオリによって構成されねばならぬといふ經濟學におけるいわゆるコペルニクスの轉回を試みようとする野心的な提唱でありました。この左右田説は日本の經濟學界に大きな衝撃を與え、とくに私たち青年學徒への影響は大きかった。尤もこれはカント認識論とこれを表現する左右田博士の文章とが難解であったことが一層何か深淵な大思想の出現だと感じさせたこともあつたようであります。左右田説がすぐに理解される體のものであつたら、何だそんなことかというわけであれほどの影響はなかつたかも知れません。

そこで福田先生も左右田説に對する反批判を試みられたが、これは成果をもたらさなかつた。さらに左右田博士は「經濟政策の歸趣」の一論において經濟政策の目標は無内容な極限概念としての經濟的文化價値であらねばならぬと主張し、福田博士の「生存權の社會政策」における生存權というようない具體的目標は政策目標として普遍妥當性をもたないと批判したのである。この福田・左右田論争は日本の經濟學界において特筆されねばならぬものであります。このような論争は私をヘーゲル研究

に向わしめた一つの動因でありました。私が一九二六年にドイツ留學から歸つて翌年に最初に發表したものは「純理經濟學と心理主義」と題する左右田認識論の批判でありました。私の觀點はドイツで構想した「綜合辯證法」であるが、その主旨は一言でいえば極めて簡單なことで、先驗概念といえども直觀的現實から構成されねばならず一たび構成された概念は逆に現實認識の規制者となるということ、いわゆる心理主義と論理主義とを綜合するものであります。

さらに生存權論争については生存權の容認は生存競争による社會發展のために阻害となるとするマルサス人口論の立場、また生存權は窮乏を除き社會發展をもたらすものであるとする生存權論者の立場、この對立せる二つの立場を無内容な經濟的文化價値はいずれをよしともあしとも判定しえない無力なもので、従つて經濟政策の目標はその時代の本質的動向から始發され、またその動向を促進的に規制する具體的目標、たとえば當時の生存權のごときが正しい客觀的目標であるとするのであります。

ドイツ思想史におけるカントからヘーゲルへの流れ、

すなわち主體の理論から客體の理論への移行、またそれは唯物論への展開となったように、一橋における左右田の主體理論はヘーゲルの客體理論からの反批判に逢着せざるをえない。ただ私がこのことを一橋の傳統において果しえたかどうかはもつと時を隔てて觀察される必要がありましよう。ただ私においては主體と客體との綜合をめざすものであり、客體の動向と主體の價值目標とを一元的に把握、かようにして經濟政策の具體的價值判斷をゆるしつつ、しかもそこに客觀性を求めようとするものであります。少くとも私においては左右田經濟哲學をのり超え、一つの展開をなしたと思つていたのであります。このようにしてまた私の綜合社會主義——この名稱はどうでもよい——の立場が成立するのであります。

一橋の經濟學は中山教授によって精緻さを増したことはいうまでもなく、その「安定と進歩」の概念は全體を貫く認識目標であり、同時にそれは政策目標であったのであります。このような概念を中山教授が約二十年も前につくり出したことには敬意を表さねばなりません。それは先般のローマにおけるI・E・Aの學會で「世界經濟における安定と進歩」など今更に問題にしているから

であります。

中山教授における進歩は今日の成長また發展と同義であり、安定は成長過程における景氣變動の安定を意味しているようです。しからば今日、日常に論ぜられる構造變動とその整合とは中山教授の體系のどこにはいるのか。中山教授にはもちろん「日本經濟の構造分析」の編著もあるが、これは中山體系からはみ出しているのであります。私は經濟動態を發展變動と循環變動と構造變動との三つとする。これは綜合辯證法の矛盾性原理、同一性原理、全體性原理に對應するものであるが、そこから進歩と安定と整合との三つの目標概念が成立するのであります。とにかく、中山教授の「安定と進歩」は語呂は大變に好いけれども、この體系は修正を必要とすると思われ、それによって一橋經濟學傳統の展開がなされなくてはなりません。いな世界の經濟學界がまだ景氣變動の「かねり」と構造變動の「ひずみ」とをいかに體系化するかわからないようであり、従つて中山體系の新展開は世界の經濟學界をリードすることになるかも知れません。

上田貞次郎博士からの商業政策の講座は本學の傳統として外國貿易政策に限定されており、福田先生にも初期に「商業政策と商權の擴張」があります。明治時代のわが國は商權擴張が日本貿易政策の主眼といつてよく、また實際には一橋の出身者が日本商權の擴張を實現したともいえるのであります。第一次大戰後において上田博士

が唱えられた新自由主義は國際連盟を背景とする貿易自由化の世界的な動向に對應するものでありましたが、やがて世界經濟の同質化の進行とともに新自由主義は經濟的國民主義に移行せざるを得なかつたのであります。本學の商業政策の講座は私においては世界經濟論の方向に轉回され、板垣與一教授の世界經濟論が新に成立し、また小島清教授によつて國際經濟論の科目が設けられることになつたのであります。戦前の商業政策とか植民政策とかの科目が次第に客觀的な把握に移行してきたのであります。戦後において日本「國際經濟學會」が昭和二十五年に創立された。この學會は多くのマルキストを含み、いろいろな學問的論争をひきおこし、名和・赤松論争としての國際價值論争もあるが、この學會を中心に本學の篠原・小島兩氏の「經濟成長と日本貿易」について

の論争は特筆すべきもので、日本の經濟學界に多大の刺激を與えており、そこから一つの後進國發展理論が生れるかも知れない。

私自身については名古屋時代の實證的研究から着想された「世界經濟の異質化と同質化」それと結びつく後進國經濟發展の「雁行形態」などが、今日もまだ私の世界經濟的把握の中核をなすものであるが、もちろんこれは綜合辯證法の體系の一分岐とみらるべきもので、均衡的成長理論に對して不均衡的成長理論を形成するものであります。小島清教授が「雁行形態」に近代理論のメスをあて、最も困難な歴史事象の理論化を企てつつあることは極めて注目すべきことであります。歴史から出發して理論に進み、再び歴史の地盤に理論を綜合しようとする企ては興味深いものであり、ここに一つの一橋の傳統が展開されることを期待してゐるのであります。上田先生における歴史研究ではまだ歴史發展の形態（パターン）が充分把握されていなかった。何らかそこに歴史的規則性としてのパターンを把握しようとするようになったことは一つの發展でありましょう。

すでに學問の雁行的發展ということをさきに申したの

であります。日本の經濟學は今日なお方法論の輸入時代で、ケインズの、マルクスの、また一般にエコノメトリックスの方法などの適用によって日本經濟が分析されている。輸入機械による製品の自己生産の時代であり、もちろん輸入機械は日本で改良され、さらに輸出されているように、學問方法も若干は改良され、外國の學界に對しても逆輸出されているものもあるかも知れませんが、しかし、日本で獨自の方法が作り出されているかどうか、私のよく知らないところであります。方法なくして學問なく、方法なきところに日本獨自の經濟學はありえないであります。雁行的發展のゆきつくところに獨自の方法體系の自己生産がなくてはならないと思ひます。このような念願において私の綜合辯證法は生み出されないのではありませんが、これが福田・左右田の兩説を止揚する一橋の傳統となりえたか心細い次第であります。

哲學的思考もすべて事物の一般的な觀察から成立するものであるが、經濟學上の歴史的、經驗的法則性はいうまでもなく經濟現象の彫密な觀察から淘みとられねばなりません。ここにおいて實證的研究から何かの道具をつ

くり出そうとする試みの重要さを思うのであります。さきにもふれたように私はドイツ留學の歸路、アメリカのハーヴァード大學に立寄り、その經濟學部と商學部のリサーチ・インスティテュートを見て、これは日本に移植する必要があると思ひました。そして一九二六年に名古屋高商に産業調査室を創めた。一方に極めて抽象的に思われるヘーゲル哲學、それに由來する綜合辯證法と他方に計算機に結合する調査機關との二つを留學の土産としたのであります。しかし、これは私の理論において矛盾するものでなかつた。一切の概念と道具は直觀的現實のうちから引き出されねばならないというのがヘーゲルの一元論だと思ひます。調査室はわが國初めての「生産數量指數」の作成で世界的にも有名になったのだが、實は私の雁行形態や世界經濟の異質化、同質化の理論もそこから引き出されたものであります。尤も、現實世界は辯證法的なジグザグな動態をなすことが一般的な現實觀察から把握されており、統計的觀察にもその觀方がすでに出來ていたことはいうまでもありません。とにかく、その當時、現實から得られた統計數字を加工し、その中から何らかの法則性を見出そうという試みは日本の大學

ではまだ調査機關としては試みられていなかったよう
で、或は私の創めた産業調査室がその先驅をなすもの
であつたかも知れません。

おそらく上田貞次郎先生が私を一橋に招かれた最も大
きな動因ともいふべきものは先生がすでに「東亞經濟研
究所」を構想されており、私にその研究をやらしてみよ
うという意圖があつたからではないかと思ひます。この
研究所は戦後に現在の「一橋「經濟研究所」となり、その
調査研究の方法は上田先生のそれ、また私のそれよりも
遙かに高度のものとなり、おそらく、世界に誇るべき一
橋經濟研究所の独自の「道具」が組立てられつつあるも
のと期待しているのであります。

おもえば一九二六年の頃から私は「第三の窓」とい
うことを唱えてきた。大學の學問の窓の第一はいうまでも
なく圖書館で、ここには出來上つた内外の學問が保藏さ
れており、教授たちはそれを翻譯して講義することがで
きます。特に獨創のもち合せがないばあいに便利な窓で
あります。第二の窓は自然科學に關する實驗室でありま

す。ここでは直觀から概念や法則性を引き出すことがで
き、學問の自己生産の場であります。然るに社會科學に
ついてはこの實驗室に當る觀察機關の窓がない。この第
三の窓をつくらなければ、社會科學では學問の自己生産
はできず、輸入した道具に依存する植民地的性格を脱す
ことができない。新しい道具は與えられた素材から作
り上げられねばならない。これが私の「第三の窓」の提
唱であり、幸にして今日では各大學において調査研究機
關の盛行をみるにいたつたのであります。とにかく私は
現實觀察から何らかの新たな方法が探究され、その方法を
もつて現實分析をやる方法と現實との矛盾とその止揚と
を繰返しつつ一橋の學問が發展することを祈つてこの講
演を終ることにします。

(本文は昭和33年10月22日に行つた一橋大學創立八十三周年
記念講演の録音によつたものであるが録音が不明瞭であるた
め、メモをたどつて新に書いたところが多い)

(一橋大學名譽教授)